

トヨタ財団研究助成プログラム  
オープンワークショップ（福岡会場）参加記

九州大学大学院人文科学府博士後期課程 辻大地

2018年6月30日九州大学西新プラザにおいて、節目の第10回となるトヨタ財団研究助成プログラムオープンワークショップ（福岡会場）が開催された。6人の助成対象者の方々による研究発表と、それに基づくディスカッションからなる本会は、活発な議論のうちに幕を閉じた。この参加記では、普段は博士課程学生として歴史学を学ぶ筆者がこのワークショップに参加して、何を感じ考えたのか簡単に記してみたい。また本稿では紙幅の都合上、全ての発表内容を取り上げられないことを、予めご了承ください。個々の発表の詳細については、ホームページ上に公開されているプログラムなどを参照されたい。

さて、この研究助成は「社会の新たな価値の創出をめざして」というテーマを掲げている。すなわち助成対象者には、社会における様々な課題に対処するための、より実践的で新しい価値、方法論を見出すことが求められるのである。そのためにはやはり、課題が生じる現場での実践・分析とそれによって得られる理論との往還が望まれるであろう。

そうした往還が最も効果的に表されていると筆者が感じたのが、鈴木愛氏と渡邊悟史氏による報告である。両者とも実際にフィールドに分け入り、それぞれスナドリネコとヤマビルという「人間の思い通りにいかない」動物との軋轢緩和・共生の具体的な方法を検討する。まだ助成期間を残した中間報告とのことで具体的な「解答」を提示する発表ではなかったが、共に今後の方向性を示しており、またその方向性がフィールドでの実践から導き出された明確な根拠に基づいているという点において強い説得力を感じた。例えば鈴木氏は当初、家畜等への経済的被害解消によりスナドリネコを「隣人」として捉え直すことで、屠殺数の減少を試みる。しかし現地での参加型調査によって、スナドリネコが現地では怖れとともに認識されていることを見出し、今後はこの怖れ（畏れ）感情との共生に着目して軋轢緩和にのぞむと言う。このようにフィールドでの実践を通じた緻密な分析は、ともすれば机上の空論となりがちな解決策・方法論に、確かな根拠とさらなる道筋を与える。そういった意味で、今後また現場に戻りその理論を適用することで、助成終了後にはさらに的確な「新しい価値」が生まれるのではないかという期待を持った。

また、この両者の発表に対するディスカッションにおいて、「単純な構図への息苦しさ」「多面性の希求」という視点が出された。こうした単純化・画一化されがちな現状の社会に対する疑問という視点は、今回の発表者全員に共有されていたように思われる。単純化・画

一化された社会とは単に周縁や多様性を切り捨てた結果であり、それらを学際的で多様な視点から拾い上げることは、これまで省みられなかった価値を見出すことに寄与する。

しかし、その複雑性や多面性といったものへの扱いは、大きく二つに分かれた。すなわち、一つは蓮行氏の発表をはじめとする、複雑なものを複雑なままに扱おうと試みる方法論。そしてもう一つは岡村健太郎氏の発表をはじめとする、複雑なものを分解し構成要素として検討する方法論である。確かに前者の方法論を取る蓮行氏の研究手法は、「演劇ワークショップ」の実践を通じて複数の参加者を複数の専門家が各々の視点から参与観察するという斬新で興味深いものであり、助成満了後の最終成果が待たれる。しかしディスカッションの際にも上がった、それでは複雑なものを複雑なままであり得させるモノは結局何なのかという疑問は解決されない。これに対するものとして、震災の被災地・復興地の景観を対象とした岡村氏の発表がある。複雑な状況をそのままの形で記録する写真家と協同したこの発表において岡村氏は、「歴史研究者」としての知見でもってその風景を要素分解的に分析する。確かにこれは、複雑なものそのものを捉えた上でそれに対する分析を加えるという点において上記の疑問にも答え得るもののようにも思える。しかしながら、これは氏が「単純な近代化では捉えられない」要素として考えていたはずの土着的な関係性の密度を「美しさ」という一種曖昧な言葉で表したように、分析する側の視点によって安易な単純化に繋がってしまう恐れもあるように感じられた。理想を言えば、この両者をさらに統合するような、多様な社会の課題をその複雑さを損なうことなく、かつ明瞭に扱う方法論が望まれる。当然それが非常に困難な試みであることは両者の発表が示しており、新たな価値の創出の困難さを改めて認識することとなった。

以上、思いつくままに筆者の雑感を書き連ねてきた。実は本ワークショップ全体を通じて、大胆で華々しい社会科学的な議論・方法論に驚かされ続けたというのが率直な感想である。それは普段、文献中心の歴史学という比較的地味な世界にいる筆者にとって、羨望すら感じさせるものであった。また、ともすれば社会への還元という視点を見失い、タコツボ型の研究になってしまいかねない自らの研究に対し、再考を促すきっかけともなった。今回参加して得られた最大の収穫は、自らが研究でどのように社会に寄与できるのか、史料というフィールドと現在の社会における理論との往還の中で考える必要性を再認識できたことだと言えよう。これは「社会の新たな価値の創出をめざして」という明確に定められたテーマの元で、アカデミズムに留まらないさらに一步進んだ方法論の確立と社会への還元をすすめるトヨタ財団研究助成の方針と、それに沿った助成対象者の方々による研究発表に刺激されてのことである。関係者の皆様に、深くお礼申し上げたい。